論文の和文要旨

論文題目	A Reference Grammar of Eastern Burushaski (東ブルシャスキー語参照文法)
氏　名	吉岡　乾

本論文は、以下の二点を目的として書かれている：(i) パキスタン北部で話されているブルシャスキー語のフンザ・ナゲル方言（これを「東ブルシャスキー語」と呼ぶ）のリファレンスグラマーを記述することと、その中で (ii) 先行研究で記述されている文法現象への疑問点を再検討、再考察して明らかにすることである。本論文を書くにあたって筆者は、先行研究に収録されているテキストの他に、自らフィールドワークで収集したテキストデータも用いて分析を行った。

論文の本体は以下に示す章構成で書かれている：「はじめに」（第 0 章）、文法の部（第 1～8 章）、理論的問題の部（第 9～11 章）、「まとめ」（第 12 章）。更に附録として、4 本のテキスト（附録 I；フンザ方言 3 本、ナゲル方言 1 本）と約 3,000 項目の語彙集（附録 II）とを巻末に収録した。文法と理論的問題とを扱っている部分の、各章の詳細は以下の通りである：

第 I 部 — 文法

第 1 章 — 音体系　この章では音韻的な情報を扱っている。東ブルシャスキー語には 36 の子音と 10 の母音がある。大まかに言えば、音節構造は CCVCC であり、更にこの言語は弁別的なピッチアクセント体系を持っている。ブルシャスキー語全体での形態音韻論的ルールもこの章で記述した。

第 2 章 — 予備知識　ここでは本論文で用いる記述の単位に関する用語を導入した。それに加えて、論文内でブルシャスキー語を考察する際に必要となる品詞分類を示し、以下 8 つの品詞を定義した：名詞・代名詞・形容詞・数詞・動詞・コピュラ・接続詞・間投詞。更に、この言語には 5 つの名詞クラスが存在し、全ての名詞が必ず以下のクラスのいずれかには属するということもこの章では述べた：HM・HF・X・Y・Z。

第 3 章 — 名詞　ブルシャスキー語の名詞は、数や格で、或いは名詞によっては人称によっても曲用する。名詞に用いる複数接尾辞には何十もの形式があり、いずれの接尾辞が用いられるかは語基ごとに決まっている。その組み合わせには厳密なルールというものがない。けれども一方で、複数接尾辞を二つ組み合わせてなされる二重複数表現に用いられる（二つ目の）複数接尾辞は、その何十もの接尾辞の中の一部だけであるということを記述した。一部の譲渡不能名詞は人称接頭辞を必ず要求し、常に所有者の人称を示す。この人称接頭辞は形容詞（の感情経験主）や動詞（の受動者）に用いられるものと同一である。ブルシャスキー語で格の標示は、格接尾辞によってなされ、その形式は十種類を上回る。その中でも、場所を示す格に関しては、4 つの位置格と 3 つの方向格との組み合わせで実現する。いずれの先行研究もがゼロ形態素を立てていないが、筆者は絶対格接尾辞の-Ø を立てて格体系を記述した。

第 4 章 — 指示詞・人称代名詞・疑問詞　ブルシャスキー語の指示詞（指示代名詞・指示形容詞）は指示対象の名詞クラスに合わせて異なった語形を取る。形態的にも意味的にも、指示詞は二つのグループ——近称・遠称とに分類され、更にそれに並行する形で疑問詞が存在する。人称代名詞は一・二人称にのみ存在し、三人称には指示代名詞が用いられる。

第 5 章 — 形容詞・数詞　指示対象が複数である名詞を修飾する場合に、一部の形容詞は、名詞と同様に複数接尾辞を任意で取る。この接尾辞は、名詞に用いられるものの内の一部である。それとは別に、一部の感情形容詞は感情経験主を示す為に人称接頭辞を常に取る。数詞とは、一種の特別な形容詞のことであり、一般的な形容詞と形態的、統語的に異なった振る舞いを示す（序数接尾辞、z 類形、類別接尾辞を取れる、など）。

第 6 章 — 動詞類　ブルシャスキー語の動詞（語根）は、接辞による以下の五つの派生プロセスの複雑な組み合わせによって語幹派生される：完結・人称・使役・複数・アスペクト。アスペクトを除いたこれらの派生プロセスは語根ごとにその選択肢が限られており、その組み合わせは（少なくとも現代語では）生産的ではない。使役接頭辞に関して言えば、一部の一項動詞語根が他動詞に派生される時にしか用いられない。動詞・コピュラは主語参与者の人称・数・クラス、極性、ムードを示し、更に一部の動詞は受動者（undergoer）

参与者の人称・数・クラスとも一致する。ブルシャスキー語には五つのムードがある：現在直説法・非現在直説法・命令法・希求法・条件法。「(非) 現在法」というのは筆者のオリジナルな用語であり、少なくともブルシャスキー語の先行研究には見られない概念を指しているものである。非現在接辞 *-m* は時間性表現では過去・未来を指すために用いられ、或いは条件表現にも用いられる。一方で現在接辞 *-ø* は、話者がその事態（、或いはその事態からの影響）が現在時に存在していると捉えている場面、即ち現在・将然などの叙述で用いられる。フンザ方言で動詞が補助コピュラを伴って複合的に時間性表現などを作る際にコピュラの語頭子音が脱落することがある、と先行研究には述べられていたが、近年ではナゲル方言でもその傾向が現れて来ているということも、この章では指摘した。

第 7 章 — その他の形態操作　この章では、接辞付加によらない四つの語形成法を記述した。複合操作はブルシャスキー語では、用いられているけれども、生産的ではない。単純反響操作もブルシャスキー語ではほとんど用いられていない。反響形成 (echo formation)、或いは固定分節重複（fixed segment reduplication）と呼ばれる操作は日常会話で頻繁に用いられている。反響形成とは、語形の一部を別の分節と置換して（無意味形式に変形させて）重複させる操作のことであり、ブルシャスキー語ではその置換用の分節（＝固定分節）として、第一に /m̀/ が、そして第二には /ʃ/ が好まれて用いられている。反響形成が個人差の大きい語形成であることを考慮して、話者によって許容範囲や反響形式に差が出ることも実例を挙げて併せて示した。擬音語（onomatopoeia）や擬態語（expressive）もしばしば用いられていて、その使用に際して話者は母音を交替させることや部分重複・完全重複させることによって異なった音・様態の印象を描写している。その母音交替における音象徴については、/a/ を用いることによって、/u/ や /i/ などを用いた場合よりも、より大きい音、大きい動作を表現するものであるということができる。

第 8 章 — 統語論　この章では、句内や節内での基本的な構成要素の順序を説明した後に、文法関係と一致体系に関して論じた。結論としては、ブルシャスキー語の動詞は、中核項 (core arguments) の格を能格型で支配する一方で、人称接尾辞においては、機能的に、絶対格項ではなく、主語項の人称・数・クラスとの一致を果たしている。更に、動詞における人称接頭辞は受動者役割の項との一致を見せる。節単位の側面で見れば、ブルシャスキー語には様々な副動詞的形式があり、接続詞と同様に、種々の機能を伴いつつ節の連結を果たしている。これらの副動詞的形式に関しては、先行研究での記述とは異なり、同一主語の節連結で用いられていたものが自由主語連結に変わって来ている、或いは、指示交替に関して全体的に機能が曖昧になって来ているという傾向が窺えた。

第 II 部 — 理論的問題

第 9 章 — 他動性とそれにまつわる問題　この章では、人称接頭辞を取る自動詞と取ら

ない自動詞との対、並びに同様の（二項）他動詞の対の機能差を中心に考察した。特にその他動詞の対に関して、先行研究は何故そのような対があるのかを充分に検証して来ていない部分であった。筆者の考察から、（二項）他動詞において人称接頭辞が付加されるか否かは、その他動詞節の中で目的語がどれだけもっともらしいか、言い換えれば、その目的語がどれだけ標示されるべきであるかに依存しているということが明らかになった。そして、その目的語のもっともらしさは、その目的語名詞が持っている特性、即ち、名詞クラスや定性と関連していると結論付けた。

第 10 章 — d-派生　ここでは、*d-* 接頭辞による動詞派生について論じた。この *d-* という接頭辞は、研究者間で意見の分かれている接頭辞である。筆者は本章での考察を通して、この接頭辞の示す様々な意味・機能を、五つの機能（接近移動・状態変化・静的状態・結果状態・逆使役表現）に集約することを提案し、更にその機能間には文法化の方向性による説明が可能であることを示唆した。これらの機能は各動詞語基の具体的意味に合わせて実現するものである。これら全ての機能において、動作の終着点が含まれていると考えられ、従って、これらは完結的（telic）な特性を共有していると言うことができる。

第 11 章 — 定性と特定性　この章ではまず、不定接辞である *-an* と *-ik* とに関してテキストデータを用いて調査をし、それぞれの名詞が持っている特性の間に見られる形態統語的・語用論的関係を考察した。その結果、不定標識は、指示対象が不定である場合の中でも、不特定的な解釈や否定節の中で比較的多く用いられる傾向にあることが分かった。更に、話者は発話内で指示対象の定性・特定性に基づいて文法役割を選んでおり、従って、そういった属性が統語的な表現を左右していることが明らかになった。